

令和7年度第1回旭川市史デジタルアーカイブ検討会 議事要旨

日 時：令和7年7月25日（金） 午後6時00分から午後7時30分まで

場 所：旭川市総合庁舎2階 臨時窓口スペース

出席者：参加者9人（50音順、敬称略）

赤間 歩美、海老名 尚、小林 蒼斗、高橋 健史、谷口 雅彦、
富田 一、那須 敦志、宮田 健一、森崎 真美恵

事務局4人

総務部次長 金、総務課長補佐 岡田、総務課主査 安江、総務課 高島
傍聴者0人（市民0人、報道0人）

- 議 事：1 事業の概要
2 今後の進め方
3 意見交換
4 その他

議事に入る前に、事務局の紹介、参加者の自己紹介、進行役の選出を行った。

議事1 事業の概要

事務局から議事1について説明。

議事2 今後の進め方

事務局から議事2について説明。

議事3 意見交換

参加者から本事業にかかる考えなどについて、意見交換を行った。参加者の発言等は次のとおり。

【参加者】

昨年は、昭和20年までの『新旭川市史』の資料があった上で作成されたが、今年度からは資料がない中で進めるので大変だと思う。どのように進めていくのか。

【事務局】

事業の前提として、史実を一から研究調査しながら進めるということが難しいので、そのような専門知識によらないまとめ方として、事実確認がはっきりとした資料を集めて示していく。扱える資料の数量には上限があるので、基本的な出来事、関心の高いテーマ等を優先しながら進める。

また、年表は各業界や分野でそれぞれ存在するが、一本化されたものがない。作業としては、まずは基本的な出来事で柱となる年表を作って、そこに様々な年表を参照して肉付けしていく方法を考えている。また、「新旭川市史」の年表と同じような分野の分け方、見やすさ、探しやすさ等、体裁を整えて作ることを考えている。

【参加者】

事務局の話にあったとおり、アーカイブの骨格は年表だが、『新旭川市史』の年表は昭和20年までしかない。精密度の異なる旧市史（『旭川市史』）の年表は昭和40年代まであるので、これを少しずつ工夫しながら生かしながらということ。事務局は大変だが、様々な協力を得ながら進めてほしい。

【参加者】

昔の人が建物を建てたときの想いが分かる資料があると良い。例えば、文化会館を立て替えるとき、今の文化会館はどういう想いで作ったのかといった資料。市役所は建て替えるときに昔の資料を公開しているが、他の施設もそういう資料があれば、新しいものを作る人に流れが伝わる。

もう1つは、ごみ処分場等の必要な施設。昔も必ず存在したものなので、どういうところにあったか調べられると嬉しい。

【参加者】

デジタルアーカイブは基本的には資料集だと思っているが、資料集の範囲だと、一般の人になかなか拾ってもらえないと思う。写真や地図、年表を充実させることを基本としつつ、読み物的なコンテンツを盛り込んでいくことが鍵を握っていると思う。

もう1つは、利用してもらうための工夫が必要。イベントのようなもの。例えば、データベースを利用して答えに辿り着けるクイズ大会等。仙台市では住民に古い写真や動画を持って来てもらい、それに対するコメントをもらい、アーカイブに取り込んでいる。なかなか難しいが、それも市民の関心を盛り上げる手法の1つだと思う。市民周知の取組も考えていけたら良い。

【参加者】

読み物はどのようなものにするか、通史がない状況の中では難しいところもある。代わりとして目先を変えた工夫をしているところだと思うが、質を担保したものがつくれるか、誰に依頼するのかなど、この場でも意見を交わせればよいと思う。

【参加者】

かなり時間がかかる作業だと思うが、どういう形で進めているのか。

また、小さい子やお年寄りが調べたいときでも、1つのところから色々なものにアクセスできるかが大事。昔開催されたイベントをやってみようなど、今やこれからの旭川を考え、盛り上げることに繋がると思う。

【事務局】

まずは最低限のデータベース、年表や写真資料をしっかりと集め、固めていく。そしてそれらを活用しながら、並行して、又は今後へ向けて、読み物等のコンテンツを充実させていく。

かつての編さん事業を休止した反省に立って考えると、いつまでも同じ力量で事業を続けることは難しいので、この3年間で集中的に作業し、令和9年度までに現代まで歴史情報を整理し、その後は随時直近の情報を年表化、デジタル化できるような、持続可能なかたちにしていくことを目指している。

【参加者】

数年経ったときにプロジェクトが小さくならないように、市民にも取組をアピールしながら、協力を集められるようにしなければならない。写真を専門に扱う立場として、図書館等にある写真の保存状態やコンディション等の相談に乗れると思っている。

東日本大震災や、阪神淡路大震災などの例をみると、戦争もそうだが、体験を人に話せる、情報を提供できるようになるまでに、相当の時間がかかるものがあり、ゆくゆくは、そういったものもアーカイブに残せたら良い。

函館のNP0 法人では、市民の家から資料を複写して集めて展示しており、凄く面白い。能登の記録センターでは、市民が震災前の写真を持ち込んだり、震災前の地図を大きな壁に貼って震災で失われたものを書いている。オーラルヒストリーもその場ですぐ記録できる。沖縄県南城市のデジタルアーカイブは、昔の写真を集めて、それをもとに今の町を歩くツアーをしている。そういうものも作れたら良いと思う。

【参加者】

アイヌや開拓などを学ぶ小学生3・4年生の地域学習では、すでに1人1台のデジタル端末を活用できる環境にある。まちは勝手に発展したわけではなく、必ず人々の営みがある。様々な人が活躍して今があるので、このような人物の活躍に焦点を当てると、まちへの愛着と誇りに繋がると思う。

また、教育委員会と協力し、教員に対してデジタルアーカイブの利活用を具体的に促すようにすると、活用が広がりやすい。社会科教員の集まりでも周知できる。社会科の授業だけでなく、修学旅行の事前学習やクイズ大会等でも使える。

【参加者】

旭川市の歴史に触れるきっかけ、引き寄せることにつながるものがあれば良いと思った。私自身は、動物園通りに電車が通っていたことを祖父母に聞いて知った。家族や職場の人の話から興味を持つこともあるので、そういった情報に触れやすく、自分の中に落とし込みやすいものがあればアーカイブは発展するのではないかなと思う。

また、留萌市では、市民の協力を得て、店や建物の情報を載せた手書きのマップを作成する取組がある。旭川市でも、イベントを介して市民自らが調べたりすることで、旭川市の愛着が深まっていくのではないかなと思った。

【参加者】

私の周りの大学生は、旭川市の歴史を知らない人が多い。旭川市に住んでいる中学生やご年配の方は学校で学び、話す機会も多いが、大学から旭川に来た方は歴史に触れる機会が少ない。歴史を知らない人、学ぶ機会が少ない人を忘れてはならないと感じている。

また、学生の生活史をテーマにした研究では、働いていた職員の日記等も調査していて、これを食べ、こんな苦しいことがあって、こんな娯楽を楽しんだという、身近でリアルな面白いものがある。歴史に残るものではないが、そういう身近さも残せたら、大学生くらいの年代でも見るきっかけとなったり、面白いと感じるのではないかと思った。

【参加者】

3か年のこれだけの作業量の事業に対して、人員が足りないのではないかと感じるが、今後の展望を伺いたい。

【事務局】

全庁的に限られた人員と予算の中で行っていくこととなる。検討会の参加者や市民、様々な方の助力を得ながら進めていければと思う。

議事4 その他

意見・提案等の発言なし

以上